

研究会に出席して

村石京子

五十五年十月二十八日に三重大学教育学部附属幼稚園で研究会が開催され、その会に出席させていただいた一人として報告文を書くことになりました。研究会のテーマは——子ども同士が言葉を交わし合う活動——というもので、どのような活動が展開されるのか私の関心を惹起するものでした。

その日のプログラムは、午前中の各組の公開保育が行なわれ、続いてゆきぎ室で園長の植村稔先生の挨拶、副園長の牛場秀子先生のこの附属幼稚園の撮影記録を通しながら「今までの歩み」についての説明、そして本日の指導に関しての各組担任の先生方の指導経過報告や反省などがありました。午後からは研究協議会と、大阪市立大学の堀真一郎先生による「ニイルの教育思想と幼児教育」という講演会が催されました。

午前中の公開保育では、その数日前に芋ほりに行って収穫して来たさつまいもを材料にしたものが各組に見られ、さつまいもスタンプでつくったのれんや、表情豊かなかわいい芋人形が夫々のコーナーにおかれてあったり、また当日もその活動が引き続いて行なわれている級もありました。全体の活動としては、四歳児の級では、自分たちの掘ってきたさつまいもを使って、うれしさと真剣さを交えた表情で一生けんめい鬼まんじゅうを作っている様子が可愛らしくほほえましいものでした。五歳児級では、芋人形を作って夫々のグループ毎にお話をつくって発表したり、導入部分で教師からOHPを使って「カライモマンの話」を聞いたあと、グループ毎に話の統を構成し、それをまとめて発表するといったかなり高度な内容のものが見られたりして、やはり地域での指導的役割をとっておられる大学附属幼稚園としての在り方をあらためて認識させられるものでした。

そしてこの日は、同年齢学級による保育が行なわれていましたが、この附属幼稚園ではもう一つの学級、いわゆるたてわり学級と呼ばれている異年齢学級編成による指導の試みを五か年も継続してとりこんでおられ、その面での研究実践報

告が今一つの注目するものでありました。そのことについては、記録映写を通しながらの説明で、今までの歩みがどのようになされてきたか、いろいろな場面での異年齢学級においてなされる保育のねらいが、参会したものによくわかり、三歳児クラスではしばしばつき当たる問題も異年齢学級ではうまくこなされていくのを知り、私共の園でも明日からの課題にして研究していく必要があると考えさせられたものです。

例えば、園外保育に出かけるときに見せる年長児の優しい、たわりの心や、年少児の持つ信頼感なども大切に育てたいものですし、伝承あそび、リズムあそびなども教師が指導の前面に出ていなくても、もっと自然の形ですんなりと子ども同士のおそびの中に入って行って、子どものものですることができます。また、園で収穫したそら豆やさつま芋の処理、分配の方法などは子ども同士で考えあつちえを働かしていく、それこそ体験を通して覚えていくものとなるでしょう。

勿論幼稚園の段階では、同年齢学級での子どもの活動は大切にしていかなければなりませんし、そのみに定着してしまいうのではなく、ある場面では異年齢学級編成の方が保育効果があり、着実なものとなる、この辺をよく考えて見なければ

ならないと今までの研究不足を反省させられる思いでした。

研究会は十月二十八日に一日開催されたわけですが、当日出席させていただいた者として受けた感想としては、三重大学教育学部附属幼稚園の三か年計画の研究実践の積み重ねが、この日に結実したものとして受けとめられました。これは勿論、園の先生方のはかりしれない熱意とその真摯な研究実践の努力によるものと思いますが、なかんずくその足跡を見事に残し、それを当日の出席者に伝えることが出来たのはあの撮影記録によるところが大きいと思うのです。

私共の園でも、常日頃いろいろな記録を撮っておいて、自分たちの研究や反省の手がかりにしなければと話し合いながら、人手不足などが先行して仲々実践に移せないで過ぎていきましたが、やはり実行するこの必要性和大切さを痛感しながら帰路についたのです。(お茶の水女子大学附属幼稚園)

